



Prepare for disaster

# 防災だより



No.2 2021. 9.1 発行

宮城県村田高等学校 防災委員会



## どうして、9月1日は“防災の日”なの？

9月1日は、関東大震災が発生した日であるとともに、暦の上では二百十日に当たり、台風シーズンを迎える時期でもある。1959年9月26日の「伊勢湾台風」によって、戦後最大の被害（全半壊・流失家屋15万3,893戸、浸水家屋36万3,611戸、死者4,700人、行方不明401人、傷者3万8,917人）を被ったことが契機となって、地震や風水害等に対する心構え等を育成するため、“防災の日”が1960年に創設され、1982年からは、9月1日の防災の日を含む一週間を“防災週間”と定めている。（東京消防庁HPより）



### 地震は 突然来る



🌀 最新科学でも 地震予知は ほぼ不可能  
地震は実験や過去の事例を解析しながら、予測していくしかない。動物の異常行動等「地震の前兆」として知られているものはある。だが、この数値がこうなったら、何分後に地震が起きるなどと断定できるにはいたっていない。

### 🕒 大事なものは揺れの大きさよりも 長さ！

- 震度6弱の場合
  - 揺れが10秒程度 → 直下型地震  
「固定された家具は倒れにくい」
  - 揺れが1分～3分 → プレート境界型地震  
「固定した家具でも倒れる」  
「津波が発生する」



### 地震発生！命を守る行動

#### 🏠 家は1階から倒れる 体の固定を！

□ 建物が倒壊するときは1階から、とくに採光のための開口部分の多い南側から崩れる。揺れているときは、転倒によるケガをしないように自分の体を固定することだ。ベッドや机の下にもぐり込むか、太い柱につかまるのがよい。強い揺れが収まってから、安全に逃げよう。

#### 🏃 倒れやすいものから すぐに離れる

□ 揺れが起きたとき、あわてて屋外に飛び出すのもいけないが、危険な場所から動かないのもいけない。家庭では、食器等のある台所がとくに危険で、家具の少なす場所で揺れをやり過ごす。街で地震にあったら、ブロック塀や自動販売機から急いで離れよう。



## 地震は「備え」で大きく「減災」できる



### 🏠 火は小さいうちに 消す努力を！

□ 水道が止まっている可能性も高いが、台所で火を使っているときは、すぐに消すのが基本だ（自身の安全確保が前提）。油が出火したら水をかけず、座布団などをかぶせ、空気に触れないようにして消す（窒息消火）。ストーブなど電化製品が燃えている場合は、いきなり水をかけると感電のおそれがあるため、コンセントを抜いてから消火する。火が出ていなくても、停電後の再通電で壊れた家電から出火する可能性があるため、避難時は電気のブレーカーを必ず落とそう。

### 🏠 今からできる 地震に強い生活環境づくり

□ 地震に対しては、発生後にすることよりも、日頃から備えるほうが重要だ。小さな子どもがいる家では、就寝中に揺れたらとっさに抱きかかえて安全な場所にもぐり込めるようにしておく。高齢者の寝室には、大きな家具を置かないようにする。災害時は水道・ガス・電気などのライフラインが止まってしまうため、水や非常食などの備蓄をしておく。また、交通機関がマヒして、帰宅難民になる覚悟もしておく必要がある。一般に自宅から20km離れていれば、徒歩帰宅はまず無理だ。災害を想定し、普段の生活環境や生活習慣を見直し、避難場所までの安全な避難経路も調べておこう。



## 教訓を伝える武士の証言

『柏井氏難行録』より



土佐藩の柏井貞明という武士の家族が津波に襲われ、避難するさまを述べた記録がある。それによれば、1707年の宝永大地震による大津波がきた時、柏井貞明は8歳。詳細は省くが、柏井一家は逃げ遅れ、津波にのまれた。貞明は木にしがみつき、水に耐えていたところ、そこへ背中に幼い妹を背負っていた父が流れつく。しばらくして、振り返ると、祖母が津波で破壊された家屋のそばで危うくなっていた。父は、そこに助けに行こうとするが、背中に子を背負っている。行かなければ祖母は死んでしまう。ここで、この父は今では考えられない行動をとった。「しかたなく、背負った女子を波中に投げ捨て、波をしのぎ、かろうじて、母(祖母)のもとにいたる」4歳の娘を波に投げ捨て、老母を助けに行ったのである。江戸時代、「孝」は、それほど重かった。災害時には、平時の習慣や規則が、人命を損ないかねない場合があるのだ。津波の第一波は、しばらくして引き、あたりは白砂の平原と化した。家族を捜したが、兄も母も弟も姿が見えない。祖母を助ける際、波間に捨てられた妹はもちろんいない。この日は、10月28日で気温は低い。津波で濡れた体は寒風にさらされ、どんどん体温が奪われていった。そして、「また大潮がくる」と津波の第二波の襲来を知らせる声が出た。父は祖母に「とにかく山に逃げよう」とすすめたが、祖母は「天地滅亡の時が来た」とみえる。どこに行っても死ぬ。ここを動かさず、溺死するだけ」と言い出したが、父は「逃げられるまでは逃げてみて、その行き先で、どうにでもなれ、です」として避難をすすめた。幼い貞明がしぶる祖母の手を引き、よろよろと歩き出した。しかし、貞明はまだ8歳、「津波にのまれ、身体疲れて一歩も(祖母の手を)引っ張ることができない」歩けないのに背後から「津波がくるぞ」の聲がかかる。「その悩みといたら、言いようがない」後年、そう語っている。300年前の古文書は我々に物語る。老人・子どもは災害時、低体温症にとくに弱いこと。年長者は責任ある言動をしなければならないこと。疲労困憊時には弱気になり判断がにぶること。我々はこれらを自覚しておくことが大切なのである。これらの教訓は、何も災害時の避難のことだけではないだろう。








## 土砂災害



近年、地球温暖化や集中豪雨の影響により、土砂災害がよく起きている

土砂災害には誤解も多い。急斜面で起きるイメージがあるが、土石流は5度程度の、ほとんど傾斜のわからない場所でも発生する。また、山が木々や竹におおわれ、手入れもされているから安全というものでもない。根の張っている表層部分は確かに強いが、雨水が浸透すれば根の下からすべり、林全体が落ちてくる。地盤がかたい地点でも、地震などの衝撃があったりすれば土砂災害は起きる。山地や丘陵地の多い日本ならどこでも土砂災害が起きうると考え、大雨が降ったときや地震が起きたときには警戒したい。

日本では、高度成長期以降に丘陵地での宅地造成を進めたため、住宅地で土砂災害が起こりやすい。造成した土地は、山をけずった「切土」と、土で埋め立てた「盛土」に分けられるが、土地を埋め立てている「盛土」の方が崩れやすい。川や湖を埋め立てた場所も、水が集まりやすいので危険だ。

-  日本は何度も巨大地震に見舞われてきた！
-  一定の周期で巨大津波が日本を襲っている！
-  日本各地の火山が噴火の可能性を秘めている
-  日本は台風の通り道！ 高潮や洪水に要注意
-  宅地開発や埋め立てで土砂災害が頻発！



## 『災難』について (内田より)



参考文献 磯田道史「災害の日本史」

『災難』思いがけず身に降りかかってくる不幸な出来事。つまり、「何で俺なんだ！」の時である。日々漫然と生きている人は、本人には災難に思えても、実は必然であったり、いい加減な人は災難と自覚することもできないので、災難に遭うのは、コソコソと真面目に生きている人なのである。それで、誠実一路を貫いているウチダは、幾度も災難に遭ってきた。

高校3年、「世界史」の授業の時である。廊下側から2列目の一番後ろの席で真面目に授業に取り組んでいたウチダの前方の3人が、史実について何やら議論を始め、騒がしくなった。S先生は「何を騒いでいるんだ！」と激怒し、教壇から後ろの席に向かってやってきた。すると何故か前方の3人を通り過ぎ、ウチダの前に鉄血宰相ビスマルクのごとく立ちはだかった。「立て！」という怒号とともにウチダは張り倒され、教室の床に沈んだ。呆然としているウチダにS先生は「受験に向け、騒いでいる場合か！」と追い打ちをかけた。「何で俺なんだ！俺は関係ない!!」声には出せなかった。災害級の『災難』であった。生徒諸君、「災害」に備えるだけでなく、時には『災難』にも備える必要があるのだ。